

## オペラやミュージカルで多様性 作り手にも黒人など起用

編集委員 瀬崎久見子

2021/12/11 11:00 | 日本経済新聞 電子版



変異型の登場など新型コロナウイルス感染の影響がなお懸念される中だが、米ニューヨークのオペラや演劇がBLM（ブラック・ライブズ・マター）やダイバーシティ（多様性）など社会の要請を受けて変化している。黒人など多人種を起用し、現代の問題と向き合っ  
て、今後のショービジネスの方向性を示す。

2021年9月末、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で、黒人作曲家のオペラが初めて上演された。ジャズのトランペット奏者で映画音楽でも実績を持つテレンス・ブランチャードが作曲した「Fire Shut Up in My Bones」で、歌手も黒人だった（冒頭の写真）。21年秋からの新シーズン開幕を飾る演目を、黒人中心の作品にしたことになる。

### Nikkei Views

編集委員が日々のニュースを取り上げ、独自の切り口で分析します。

ワシントン・ポスト紙は「米国のオペラの重大な分岐点だ」と評した。メトロポリタン歌劇場は近年、黒人歌手による「ポーギーとベス」を上演するなど、ダイバーシティに積極的になっていた。この演目の作曲家のガーシュウィンは白人だが、今秋はその取り組み

を一步進めた。

## 日本では1月末から上映

黒人コラムニストの自伝をもとにした「Fire Shut Up in My Bones」は、幼いころ性暴力を受けた青年の物語で、現代の社会問題をはらんだオペラでもある。メトロポリタン歌劇場での舞台を収録して、映画館で上映するMETライブビューイングの一環で、22年1月28日～2月3日には日本の全20館の映画館で上映される予定だ。

演劇やミュージカルも、同じ傾向にある。「世界ステージ・カレンダー with コロナ」というサイトで米国の劇場の状況を伝えている加藤麻衣さんによれば「まずは特に演劇で、黒人脚本家の作品が増えている。21～22年シーズンはミュージカルでも、黒人音楽や文化がテーマになった作品が開幕する予定だ。また、ブロードウェイ全体で、俳優だけではなくミュージシャン、技術スタッフ、デザイナーやマネジメントにも、有色人種の雇用機会を増やそうと業界をあげて改善の動きがある」という。

米国最大の演劇賞「トニー賞」では黒人やラテン系のかかわる作品が数多くノミネートされ、授賞もした。白人以外が主演する作品は、舞台に限らず映像の世界でも既に多いが、脚本や演出などの作り手にそれが広がっている。22年は、日本人の宮本亜門が演出するミュージカル「カラテ・キッド」がセントルイスで開幕予定だ。



多様な俳優が出演する「ジャグド・リトル・ピル」。手前右が鶴原谷圭さん=Original Broadway Cast 2019 © Matthew Murphy

トニー賞で脚本賞など2冠を受けた「ジャグド・リトル・ピル」には、日本人俳優の鶴原谷圭さんが出演している。シンガーソングライター、アラニス・モリセットの楽曲を使ったミュージカルで、鎮痛剤依存、人種問題、性暴力、性的・ジェンダーアイデンティティーなど現代社会の諸相を盛り込んだ意欲作だ。ブロードウェイでは19年末に開幕し、新型コロナウイルスによる休演を経て、21年秋に再開した。

## 「一種の流行」との見方も

この作品にもBIPOC（黒人、先住民、有色人種）及び、多様な性の俳優やスタッフがかかわっている。まさに最先端の作品といえそうだが、同作に創作段階からかわり、その前から米国のさまざまな舞台に出演してきた鶴原谷さんは、安易に楽観しない。「黒人やマイノリティーを起用することが一種の流行になっている側面もあるし、プロデューサーなど、資金やパワーを持った人にはまだ白人男性が多い」という。

ショービジネスである以上、こうしたダイバーシティの作品が数多くヒットしなければ、次なる投資を呼び込めない。制作過程でたくさんの研究や議論が必要でもある。鶴原谷さんは「ダイバーシティやインクルーシブ（誰をも分け隔てなく受け入れる）の社会というのは、そう簡単ではない」と感じるという。

それでも、ロングスパンで考えれば、この流れは止められないだろう。

米国以外を見れば、英ロンドンの劇場街では「オペラ座の怪人」などを手掛けたヒットメーカー、アンドリュー・ロイド・ウェバーの新作ミュージカル「シンデレラ」が、フェミニズムの時代を反映したような、反抗的なヒロイン像で話題を呼んでいる。

アジア圏では、欧米の作品を「輸入」するだけではなく、自国で創作しようという機運が高まっている。22年は日本では人気アニメを原作に「千と千尋の神隠し」の演劇や、「バケモノの子」のミュージカル版などが開幕予定だ。韓国や中国も同様で、日本の原作を積極活用、東野圭吾の小説「白夜行」や太宰治の「人間失格」のミュージカルが中国で作られているという現象もある。

ショービジネス全体の動員数でいえば、人気映画やアニメを原作としたものが多いのは確かだ。しかし22年以降は、オペラやミュージカルも全世界で同じではなく、地域ごとに、多様な価値観を反映したものが増えていきそうだ。

[編集委員が独自の切り口で分析「Nikkei Views」一覧へ](#)



本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.